

映画について
私たちが
語ること

第1回



2019年12月号「平川克美責任編集 映画について私が語ること」
に収録した3本の対談を、ロングバージョンでお届する番外編。
3回にわたる第1回は、平川さんと川本三郎さんのお話です。

旅と映画

平川 僕は『大正幻影』や『私の東京万華鏡』なんかから入って川本さんの本を愛読してきましたが、いちばん衝撃が大きかったのは『銀幕の東京 映画でよみがえる昭和』なんです。

川本 ありがとうございます。以前、『東京人』で「映画の中の東京」という対談をした大瀧詠一さんも、そう言うてくれました。大瀧さんとお会いしたのはこのときが初めてで、出身を尋ねると花巻だとおっしゃる。私はご存じのとおり鉄道好きですから、「花巻といえば昔、花巻電鉄というのがあって、新藤兼人の『銀心中』に出てきますよね」と言ったら、「僕はいかに乗って学校に行っていました」と。あれにはびっくりというか、「これは負けた」と思いました。花巻電鉄は正面から見ると細長く、馬面電車うまおもてともいわれていて、神保町シアターで鉄道映画特集のセレクションをやった際に『銀心中』も上映したら、雪の中で花巻電鉄が登場するシーンの迫力に、観客席からどよめきが起きたのを覚えています。

平川 大瀧さんとは僕も少し親交があったって、『銀幕の東京』の影響で、成瀬巳喜男の『秋立ちぬ』と『銀座化粧』、それから小津安二郎の『長屋紳士録』のロケ地を特定したとおっしゃっていました。『銀幕の東京』では「消えた東京」に言及し、あるいはロケ地を荷風の言葉と結びつけるなど、一本の映画をこれほど幅広い視点で批評できるものなのかと驚きました。

川本 普通は監督論や映像論、俳優論を語るのが映画評論なんですが、私の場合は寄り道ばかりで。

平川 でも、それが楽しいんですよね。ああいう映画の見方を川本さんに教わったわけですが、そのうち『日本すみずみ紀行』のような旅のエッセイにも影響されるようになって、川本さんが訪ねた場所は、けっこうたどっているんです。岡山なんかだと、牛窓みや三石いしを訪ねました。

川本 三石は小津の『早春』のラストシーンに出てくる町ですね。小津は『東京物語』の撮影を尾道でやっていますから、尾道と東京とを行き来するときに、山陽本線の車窓からあの町を見つけたのではないかと思えます。

平川 実際、『早春』の脚本家である野田高梧と二人

でロケハンしているんですよね。それにしても、よくあの場所を見つけたなあと思います。

川本 よく見つけたと思う場所が出てくるのは、なんといっても『男はつらいよ』です。いまにして思えば単なる小京都ではないかという話になるんですが、そんなものが流行る以前に津和野や播州龍野でロケをしているのは、やはり先見の明があったのでしょう。シリーズに何度か出てくる岡山の備中高梁びつちゅうたかはしや、舟屋で有名な丹後半島の伊根も、いい町です。鉄道がよく出てくるのも、『男はつらいよ』の楽しみの一つです。すでに廃線になってしまった鉄道が多いんですが。

平川 あの映画には、ロードムービー的なところがあります。

川本 最初はあまり旅をしていないんですが、シリーズが進むうちに、予算に余裕が出てきたためか、寅はあちこちに旅するようになってゆく。初めて列車がきちんと出てくるのは五作目の望郷篇で、小樽から倶知安のほうへ向かう函館本線を蒸気機関車が走っていくシーンがあって、あのあたりからロードムービー化してゆくんですね。

平川 五十作に及ぶ一連のシリーズは、いまとなって